

幼児の仲間関係における自己主張表現

鈴木 亜由美

(受付 2009年11月2日)

幼児期になると子どもは仲間との対等な関係において、互いの要求のぶつかりあいを経験することによって、徐々に対人スキルを身につけていく。自己主張とは、「他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を、敵対的でないしかたで表現できる能力 (Deluty, 1979; 濱口, 1994) と定義され、発達途上にある子どもが獲得すべき社会的能力のひとつであるといえる。

乳幼児期の自己主張の発達については、従来、乳児期から幼児期初期にかけての母子関係において、子どもの自律性として現れる要求・拒否に焦点が当てられることが多かった (山田, 1982など)。しかしながら、近年幼児の仲間関係における自己主張行動についても注目されるようになってきており、これらの先行研究では、主に子どもに仮想的な対人葛藤場面を提示し、そこでどのような自己主張的反応を示すかを検討する形式で行われてきた。

それらの結果から、幼児の仲間に対する自己主張の形態は、たたく、とるといった非言語主張から言語的主張へと発達的に変化することが示されている (山本, 1995)。また、自己主張の生起しやすさは、相手の親密性 (山本, 1995) や敵意の有無 (丸山, 1999) により異なるとされている。また自己主張と向社会的行動といった他の社会的行動が関連していることを示す研究もある (伊藤・丸山・山崎, 1991)。

しかしながら、これらの先行研究では、自己主張は対人場面で用いられ得る多くの方略のうちの一つとみなされており、自己主張表現の多様性について検討した研究は少ない。成人の場合には、他者に何らかの依頼をするときには、「単純」、「理由提示」、「資源提供」、「正当要求」、「情動操作」などの多様な表現をとることが示されており (今井, 2005)、このような自己主張表現の多様性が発達過程でどのように現れるのかを検討する必要がある。

Eisenberg & Garvey (1981) は、幼児 (2歳 - 5歳) の仲間同士の遊び場面を観察し、そこでの様々な言語的やりとりを分析している。その中で、幼児が相手の働きかけを否定するときの言語表現には、「単純否定」、「理由提示」、「代替案」、「先延ばし」、「はぐらかし」などの多様性があることを示している。本研究では、幼児の自己主張表現にどのような多様性があるかを仮想場面を用いて検討するとともに、そのような多様性が日常場面における主張スキルの高低とどのように関連しているかを検討する。

本研究で検討する点は以下の3点である。1点目は、自己主張をする状況によって表現に

どのような違いがあるかを調べることである。「自己主張」は辞書的には「自分の説を強く言い張ること、またその説」と定義されるが、これには様々な行動が含まれる。自分の要求を他者に伝えるにしても、「依頼」のような弱い要求もあれば、「抗議」のような強い要求もある。また、「提案」のように行為者側が自発的に相手に要求を伝えるものもあれば、「拒否」のように相手の要求に対する反応もある。前述のように、成人の依頼表現には、「貸して」といった単純な表現も日常的に使用される（今井，2005）一方で、仲（1986）は、児童・青年の拒否表現には「いやだ」といった単純な表現は少なく、多くの場合相手の要求の背景にある文脈情報を否定するような間接的表現を用いることを示している。幼児の自己主張表現について調べた研究はまだ少ないため、いくつかのタイプの違う自己主張状況を設定し、表現にどのような違いが生じるかを検討することとする。

2点目に性差について調べることである。子どもの言語発達に関する研究には、女兒の優位性を示しているものがあるが（Fenson, Dale, Reznick, Bates, Thal, & Pethick, 1994）、自己主張に関する先行研究では、性差を見出しているものはほとんどない。これは前述のように、従来の研究が自己主張を対人場面で用いられ得る多くの方略のうちの一つとみなしているからではないかと考えられる。女兒は様々な行動の選択肢があるときには、自己主張よりも相手に譲ったり、相手と協調したりすることを好む傾向にあるが、自己主張表現そのものに焦点を当てると、男児よりも女兒の方が多用な表現をするという可能性も考えられる。よって、この点について検討することとする。

3点目に自己主張表現と自己主張スキルの関連を明らかにする。佐藤・目良・柏木（2003）は、仮想場面における自己主張と教師評定による自己主張の関連を検討したところ、両者の間に有意な相関は見出せなかった。しかしながら、自己主張表現の多様さという観点から、教師評定による自己主張スキルとの関連を検討する意義があると考えられる。

方 法

対象児 私立幼稚園の年長（5 - 6歳）クラスに所属する男児18名、女兒18名、計36名を対象とした。年齢範囲は5歳6ヶ月 - 6歳6ヶ月、平均6歳1ヶ月であった。

材 料 自己主張表現について調べるために、4つの自己主張場面（依頼、拒否、抗議、説得）を表す図版各1枚を用いた（Table 1, Figure 1 参照）。図版は対象児の性別に合わせて、2名の登場人物がともに同性となるように、男児用、女兒用を作成した。自己主張スキル評定は、首藤（1995）の自己制御尺度から自己主張に関する8項目を用いた（Table 2 参照）。

手続き 自己主張表現を調べる課題は、幼稚園のホールにて個別に実施した。最初に導入

としてパズルを行い、園生活についての会話をするなどして対象児とラポールを形成した。次に、図版を用いて4つの場面の状況を説明し、主人公が自分の気持ちを伝えるために、相手にどのように言えばよいかを尋ねた。回答が得られたら、それでもうまくいかない場合はどのように言えばよいかを尋ね、できるだけ多くの回答を引き出した。場面の提示順序はカウンターバランスを行った。調査時間は1人あたり15分程度であった。

自己主張スキル評定は、対象児が所属するクラスの担任教諭が、すべての対象児について、Table 2 に示した8項目の行動を、「ほとんどない」、「あまり見られない」、「ときどきある」、「やや多く見られる」、「きわめて多い」、の5段階で評定した。

Table 1
仮想場面の内容

場面	状況
依頼	お砂遊びをしていてスコップを使いたいが、友達がスコップを使っていて使えない。
拒否	きれいな石をみつけたが、友達がそれをほしいという。
抗議	お当番で食事の用意をしているが、もう一人のお当番が遊んでいて手伝わない。
提案	友達は外で遊ぼうと言うが、自分は部屋でブロックをしたい。

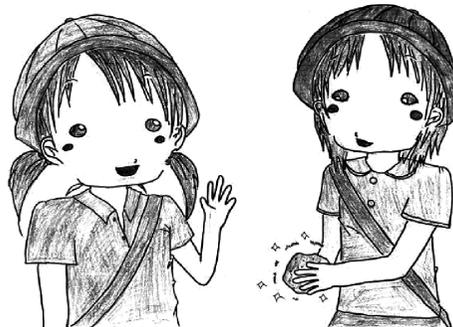


Figure 1. 用いた図版の例（拒否場面、女児用）

Table 2
自己主張スキル尺度（首藤，1995）

1. 勝ち負けのあるゲームで負けると泣いたり、怒ったりする
2. ひどい悪口を言われたり、からかわれると怒る
3. 他の子どもと自分の考えが違っているときでも主張できる
4. 入りたい遊びに自分から「入れて」と言える
5. 遊びたいおもちゃを友達が使っているとき、「貸して」と言える
6. 自分のやりたい遊びを友達を誘って始められる
7. 考えをきいたり、感想を求めると、自分なりの考えや感想を出す（持っている）
8. 人から促されないと行動が起こせない（逆転項目）

結 果

1. 自己主張表現

自己主張表現の産出総数は、1 場面あたり、平均1.57個であった。平均産出総数に性差、場面差が見られるかどうかを検討するために、性別（男、女）×場面（依頼、抗議、拒否、提案）の2要因分散分析を行ったところ、すべての主効果および交互作用は有意ではなかった。

次に、産出された自己主張表現を、5つのカテゴリに分類した。1つ目のカテゴリは「単純」で、要求のみを単純に伝えるものであった。2つ目のカテゴリは「理由」で、理由を提示しながら要求を伝えるものであった。3つ目のカテゴリは「譲歩」で、相手の要求を受け入れるための条件を提示するものや、部分的に相手の要求を受け入れるものであった。4つ目のカテゴリは「共同」で、自他双方の要求を満たすために、共同的解決方法を提示するものであった。5つ目のカテゴリは「婉曲」で、状況を伝えたり予想される結果に言及したりすることにより、間接的に要求を伝えるものであった。具体的な反応例を Table 3 に示す。

Table 3
表現のカテゴリと具体例（拒否場面）

カテゴリ	表現の例
単純	「いや」、「あげない」
理由	「ほくがみつけたらあげない」、「気に入っているからあげない」
譲歩	「貸してあげる」、「見せてあげる」
共同	「一緒に遊ぼう」、「一緒に同じのを見つけよう」
婉曲	「おうちにはない?」、「もっといいのがあるよ」

性別、場面ごとに各カテゴリの平均産出数を示したのが、Figure 2 である。場面ごとに、性差、カテゴリの産出数に差が見られるかどうかを検討するために、性別（男、女）×カテゴリ（単純、理由、譲歩、共同、婉曲）の2要因分散分析を行った。

まず、依頼場面では、カテゴリの主効果が有意であり ($F(4, 34) = 31.99, p < .01$)、Ryan 法による多重比較の結果、「単純」がその他すべてのカテゴリより多いこと、「譲歩」が「理由」、「共同」、「婉曲」よりも多いことがわかった。その他の主効果および交互作用は有意ではなかった。

次に、抗議場面では、カテゴリの主効果が有意であり ($F(4, 34) = 4.77, p < .01$)、Ryan 法による多重比較の結果、「共同」が「理由」、「譲歩」、「婉曲」よりも多いことがわかった。

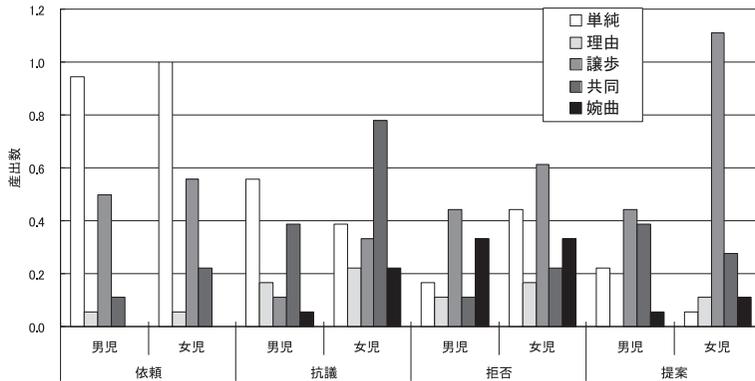


Figure 2. 場面と性別ごとの各表現カテゴリ平均産出数

その他の主効果および交互作用は有意ではなかった。

さらに、提案場面では、交互作用が有意であった ($F(4, 136) = 3.26, p < .05$)。単純主効果の検定の結果、「譲歩」においてのみ性差が有意であり、男児よりも女児に多く見られることがわかった。また、カテゴリの主効果が有意であり ($F(4, 34) = 10.71, p < .01$)、Ryan 法による多重比較の結果、「譲歩」がその他すべてのカテゴリより多いことがわかった。

一方、拒否場面では、すべての主効果および交互作用は有意ではなかった。

2. 自己主張スキル

Table 2 に示した 8 項目のうち、2 つ目の項目、「ひどい悪口を言われたり、からかわれると怒る」は担任教諭により自己主張スキルとして適切ではないと判断されたため、分析から除外した。残りの 7 項目の合計得点を自己主張スキル得点とした。男児 17.89 点、女児 18.78 点であった。性差を検討するために t 検定を行ったところ、有意差は見られなかった。

3. 自己主張表現と自己主張スキルの関連

自己主張スキル得点を中央値で 2 群に分けたところ、スキル低群 (男児 11 名、女児 7 名) は、平均スキル得点 14.94 点、スキル高群 (男児 7 名、女児 11 名) は、平均スキル得点 21.72 点であった。各群の自己主張表現の平均産出総数は、スキル低群 5.28 個、スキル高群 7.28 個であり、 t 検定の結果、2 群の産出総数の差は有意ではなかった。

次に、表現カテゴリ別にスキル低群とスキル高群の自己主張表現の平均産出数を、Figure 3 に示した。カテゴリごとの産出数について、 t 検定を行ったところ、いずれのカテゴリにおいても、2 群の差は有意ではなかった。

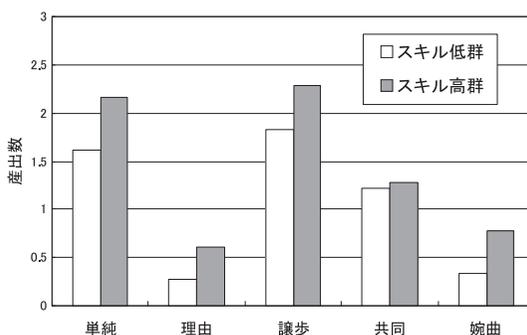


Figure 3. スキル低群と高群の各表現カテゴリの平均産出数

考 察

本研究は、自己主張の生起する状況によって自己主張表現に違いがあるかどうかを検討すること、自己主張表現における性差を検討すること、自己主張表現と教師評定による自己主張スキルとの関連を検討すること、の3点を目的として行われた。これらの3点について以下に考察する。

場面による表現の差 自己主張表現の総産出数においては、場面の差は見られなかったものの、表現カテゴリに分類して検討すると、場面による特徴が明らかになった。まず、依頼場面では「単純」が最も多かった。これは、依頼場面として用いたのが物の貸し借りの場面であったことが影響していると考えられる。「貸して」、「いいよ」、という単純なやり取りは幼児期初期から頻繁に行われており、幼児にとってそれ以上の説明を必要としない場面であったと考えられる。次に、抗議場面では「共同」が多かった。この場面は、相手がすべき当番活動をしなさい、という場面であるので、主人公側に正当性がある場面であるが、単に「やって」と言うのではなく、「一緒にしよう」という誘いかけをする方が相手に働きかける効果があると幼児が考えたのではないであろうか。さらに、提案場面では「譲歩」が多かった。これは遊びの内容をめぐって、相手と意見が対立する場面であるため、自他双方の要求を満たすような調整的な自己主張表現が好まれたと考えられる。最後に、拒否場面ではカテゴリ間に有意差が見られず、多様な表現が現れた。児童・青年の研究（仲，1986）と同様に、単純な「いやだ」という表現は少なく、幼児なりに状況をよく考慮した上で適切な表現を考えた結果であると考えられる。

さらに全体を通じて、成人の研究（今井，2005）で見られたような「理由」を伴う表現は少なく、「共同」や「譲歩」のような表現が多かった。今回の調査方法が仮想場面を用いた面接であったために、子どもの中の規範的な面がより反映された可能性もあるが、子どもは

幼児期から相手との円滑な関係を保つため、場面によって間接的な表現を好んで用いることがわかった。以上のように幼児は場面の特徴に合わせて様々な表現を使い分けていることがわかる。

自己主張表現の性差 自己主張表現における総産出数、教師評定による自己主張スキルとともに、性差は有意ではなかった。言語発達についての研究では、女児の優位性を示しているものがあるが (Fenson, Dale, Reznick, Bates, Thal, & Pethick, 1994)、本研究の結果は言語発達に性差があるのは2歳までであり、それ以降は差が見られないという説 (Huttenlocker, Haight, Bryk, Seltzer, & Lyons, 1991) に一致したものであった。唯一、部分的に見られた性差として、提案場面において、男児よりも女児よりも「譲歩」の産出数が有意に多いということが示された。柏木 (1988) は、幼児の日常生活における様々な自己主張行動を教師評定により検討したところ、「遊びへの参加」、「独自性・能動性」、「拒否・強い自己主張」の3因子が抽出されたが、自己主張の性差は「遊びへの参加」の因子のみに見られ、さらにその性差は自他の調整をはかって協同して遊ぶ受容的面に関して顕著に見られることがわかった。Figure 2を見ると、全体的に女児では、「譲歩」、「共同」が多いことから、女児は男児よりも相手の要求を部分的に受け入れる協調的な自己主張表現を好むという可能性がある。

自己主張表現と自己主張スキルの関連 カテゴリを込みにした総産出数とカテゴリ別に見たときのいずれも、両者の関連は認められず、佐藤・目良・柏木 (2003) に一致した結果となった。ここから、個別面接の場面で現れた遂行と、日常の自己主張性を教師の目で評定した自己主張スキルとの間には隔たりがある可能性が考えられる。しかしながら、Figure 3を見ると、スキル高群がスキル低群よりも多くの自己主張表現を産出している傾向は現れており、本研究で用いた方法に適切でない部分があったために有意差が取り出せなかった可能性もある。

1点は、用いた自己主張スキル尺度の問題である。今回は担任教諭がすべての子どもの評定をするために、項目数が少ない尺度 (首藤, 1995) が適当であると判断したが、Table 2の内容が、「他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を、敵対的でないしかたで表現できる能力」(Deluty, 1979; 濱口, 1994) といった自己主張スキルを反映したものであったかには疑問が残る。例えば、分析から除外された、「ひどい悪口を言われたり、からかわれると怒る」の他にも、怒る、泣く、といった言語表現以外のものも自己主張に含まれている。また、項目内容が具体的でないため、身体的攻撃を伴うものなど、適切でない行動も自己主張として判断されている可能性がある。よって、本研究で定めた自己主張の定義により一致した尺度を用いる必要があったと考えられる。

もう1点は、データ数の少なさにより、統計的有意差が取り出せなかった可能性である。前述のように記述統計で見ると仮説に一致した傾向も見られており、データを追加して検討

することが必要である。

本研究は、幼児の仲間関係における自己主張行動の研究においてこれまで検討されてこなかった言語表現に焦点を当てたことにより、幼児が場面に応じて様々な表現を使い分けていること、「譲歩」や「共同」といった自他双方の要求を満たすための表現を好んで用いていることなどが明らかになった点で意義のあるものであったといえる。今後は先に述べたような手続き上の問題点を改善して、再検討を行うことが求められる。加えて、今回は対象を5-6歳児に絞ったが、年齢範囲を広げて自己主張表現の発達の変化を検討することでもさらに興味深いデータが得られるであろうと考えられる。

引用文献

- Delty, R.H. (1979). Children's action tendency scale : A self-report measure of aggressiveness, assertiveness, and submissiveness in children. *Journal of counseling and clinical psychology*, **47**, 1061-1071.
- Eisenberg, A.R. & Garvey, C. (1981). Children's use of verbal strategies in resolving conflicts. *Discourse processes*, **4**, 149-170.
- Fenson, L., Dale, P., Reznick, J.S., Bates, E., Thal, D., & Pethick, S. (1994). Variability in early communicative development. *Monographs of the society for research in child development*, **59**.
- 濱口佳和 (1994). 児童用自己主張尺度の構成. 教育心理学研究, **42**, 463-470.
- Huttenlocker, J., Haight, W., Bryk, A., Seltzer, M., & Lyons, T. (1991). Early vocabulary growth : Relation to language input and gender. *Developmental Psychology*, **27**, 236-248.
- 今井芳昭 (2005). 依頼・要請時に用いられる影響手段の種類と規定因. 心理学評論, **48**, 114-133.
- 伊藤順子・丸山 (山本) 愛子・山崎 晃 (1999). 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連. 教育心理学研究, **47**, 160-169.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達. 東京大学出版会.
- 丸山愛子 (1999). 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達の研究. 教育心理学研究, **47**, 451-461.
- 仲 真紀子 (1986). 拒否表現における文脈的情報の利用とその発達. 教育心理学研究, **34**, 111-119.
- 佐藤淑子・目良秋子・柏木恵子 (2003). 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究 (1)-4 —社会的場面における自己制御機能の発達—. 発達科学研究, **17**, 25-38.
- 首藤敏元 (1995). 幼児の向社会的行動と自己主張-自己抑制. 筑波大学発達臨床心理学研究, **7**, 77-86.
- 山田洋子 (1982). 0~2歳における要求-拒否と自己の発達. 教育心理学研究, **30**, 38-47.
- 山本愛子 (1995). 幼児の自己調整能力に関する発達の研究—幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について—. 教育心理学研究, **43**, 42-51.

Summary

Expression of Self-assertion in Young Children's Peer Relationships

Ayumi Suzuki

This study explored the kinds of variations in assertion expression in young children, and confirmed whether children with high assertion skills can produce more patterns of assertion expression than other children. Thirty-six 5- and 6-year-olds were presented four types of self-assertion contexts (request, protest, refusal, and proposal) using hypothetical stories. Children were asked what the character should say to express herself in these contexts. In addition, their teacher evaluated classroom assertion skills of each child by assertion scale. There were no differences of gender and context in the total number of responses. Responses were classified into five categories of assertion: simple, reasoned, concessive, cooperative, and indirect. The results showed that there were variations of expression in young children's self-assertion. The hypothesis that children with high assertion skills produced more expressions than other children was not supported.